片山委員長

2

家政学の定義

(1) 家政学の定義

「家政学」(英文名 Home　Economics [1]) は、人間生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から研究し、生活の質の向上と人類の福祉に貢献する実践的総合科学である。

すなわち人の暮らしや生き方は、社会を構成する最も基盤となる部分であることから、全ての人が精神的な充足感のある質の高い生活を維持し、生き甲斐を持って人生を全うするための方策を、生活者の視点に立って考察・提案することを目的としている。

従って、人の生活に関連する人文・自然科学の研究分野や社会の諸問題を、生活する人の視点から統合的に捉え、他の学術分野と補完し合いながら、人の暮らしや生き方に関連する今日的課題を総合的に検討し、現代の変化に富む社会での生活に対応させる必要がある。□

家政学が考察の対象とするのは、人と人との関わり、人と物との関わりによって成立する人間の生活であるが、考察の対象である人・物・社会はいずれも時間とともに変わりゆくもので、不変のもののではない。社会全体の不特定多数の人を対象としながら、同時に個々人の生活を個人レベルで重視していくことが必要である。

家政学が学部名称、および学術分野の名称としてわが国の新制大学の学部教育に採択されたのは、アメリカの占領下にあった第２次世界大戦終結後の 1948 年で、当時既に家政学分野の学部名称として Home　Economics を定着させていたアメリカの家政学者がアドバイスしたことに起因している［２］。

新たに家政学部を開設した大学の前身校は、全国の国立・公立・私立の高等師範学校・師範学校・専門学校等で、これらの学校は現行の家庭科に当たる教科目担当の教員養成課程を開設し、明治・大正・昭和において人々のくらしを支えるために不可欠であった裁縫や料理の技術を教育するための家事科や裁縫科を設置していたところであった。一方、第 2 次世界大戦後のわが国の産業の発展は著しく、人々の暮らし全般に大きな変革が生じた［３］。裁縫や料理と言った技により手作りした衣類や食品を用いた暮らしから、市場に出回って来た工業的に大量生産された製品（代表例としては既製服）を購入しこれらを用いて暮らす方式へと転換して行くにつれ、生活者に対しては種々の生活財や暮らし方に対する科学的な知識が要求されるようになった。一方、製品を生産する立場としては生産性を高める努力が重要で、次々と新しい製品を製造しては販売して行ったが、これらの製品は必ずしも人に対して安全性が担保されたものばかりではなかった。

このような状況の中で新設された家政学部（大半の学校が小学校・中学校・高等学校の家庭科教員を養成していた）では人の視点を重視した実践的総合科学として全く新しい学問領域を開拓して行くことになった。

新設された家政学部では人の暮らしに関わる広範な学科目（本報告においては以下の５領域に大別する。1, 食べることに関する領域、2, 纏うことに関する領域、3, 住まうことに

関する領域、 4, 子どもを産み育てることに関する領域、5, 家庭生活を営み社会の中で生きることに関する領域）が設置され、家政学に隣接する又は基礎となる多くの学問領域（例えば、工学・農学・医学・理学・美学・文学・経済学・心理学ほか）を専門分野としていた多くの教員の参画のもと、新しい時代に即した実践的総合科学としての家政学の研究および教育が精力的にすすめられていった。

1960～1970年には待望の家政学研究科修士課程が認可され、さらに1979年頃には複数大学に博士課程の設置も認可され、遅まきながら人の暮らしに関わる事象について科学的な裏付けをするための研究体制も整えられた。

しかしながら、戦前から博士課程が設置され既に教育研究体制が整っていていた他の多くの学問領域に比べると、後継者育成の体制作りが遅れた。そのため、特に国公立の大学院等の新設に当たっては、論文数優先の採用基準が実施された場合が多く、新たに他分野の教員を新規採用せざるを得ない事態となった。その結果、採用された教員の多くが、総合科学としての家政学において最も重視して来た「人の生活の視点に立つ」ことが後退し、生産者の立場や販売する立場、純粋な学問的な興味による研究事例が増加していき、むしろ隣接する既存学問と同じ視点での教育・研究を進める傾向が強くなった。人の生活の視点に立つ場合には、質の高い生活の尺度としては経済性や利便性だけではなく、生きることの価値観や幸福感を感じて生活できる精神的充足感が重要である。

加えて、「家政学」の名称が第２次世界大戦前の生活物資を手作りする技術を重視した「料理・裁縫」の印象を払拭できない事を危惧して、国公立大学においては総ての大学が学部名を「家政学」から「生活科学」「生活環境学」等に改称する方向に進んだ。しかしながらこれらの大学においても、カリキュラムを総て新しくした大学は少なく、「家政学部」当時に開設されていた教科内容が継承されているところが多く、家庭科教員養成や人に関わる種々の資格士養成も継続されている。すなわち、ここで定義する「家政学」の教育を行っている。したがって、本参照基準は、これら「生活科学部」「生活環境学部」等の名称の学部等をも包含した学問分野の参照基準として作成するものである。

(2) 家政学の諸領域

家政学は広範な諸領域から成り立っている。これらについて本報告では以下の５つの領域に大別し、それぞれについて解説する。

① 食べることに関する領域（食物領域とする）

この領域は、人の生命維持に最も重要な食生活に関する領域を研究教育の対象とし、食品・調理・栄養・食品衛生・食文化等に関する学科目が設定されている。それぞれに隣接する又は基礎となる学問分野としては農学（農芸化学・食品化学・食品工学・栄養学・微生物学・食品衛生学・醸造学・食品加工保蔵学ほか）・医学（代謝学・生理学・病理学ほか）・理学（物理化学・物理学他）・工学（電気工学・機械工学ほか）・美学・心理学・文化人類学等広範に渡っている。100 年近い人生を健康に生き抜くため、自然環境や社会環境に対応しながらどのような食生活を送って行ったら良いか、より良い食生活を提案することを目標としている。

② 纏うことに関する領域（被服領域とする）

この領域は、人の生命維持に必要な体温の保持に加え、人の心に安らぎを与えるとともに社会の中で生活するために必要な、衣生活に関する領域を研究教育の対象とし、被服材料（主として繊維製品）・被服構成（服作り）・被服整理（洗濯）・被服衛生（被服と身体との関わりや着心地）・色彩・デザイン・服飾史とうに関する学科目が設定されている。それぞれに隣接する又は基礎となる学問分野としては工学（繊維工学・紡績紡織学・染色化学・縫製工学・電気工学・機械工学ほか）、理学（人類学・有機化学・物理化学・界面化学ほか）、医学（解剖学・人体生理学ほか）、環境学、心理学、美学（色彩学・デザイン学・美術史他）、文化人類学等広範にわたっている。ライフステージ毎に、人と環境に対してより良い衣生活の在り方を提案することを目標としている。

③ 住まうことに関する領域（住居領域とする）

この領域は、人の生命維持およびより良い住生活の実現を目標として、住生活・住環境に関する領域を研究教育の対象としている。住居および住環境計画・空間デザイン・住宅構造材料・防災・住居管理・住宅問題・住宅経済・住宅史等に関する学科目が設定されている。それぞれの隣接又は基礎となる学問分野としては、工学（建築学・土木工学・電気工学・照明学・材料工学ほか）、環境学、美学、文化人類学、芸術学（美術・工芸）、医学、人間関係学等広範にわたっている。ライフステージ毎に、ライフスタイル等を考慮したより良い住生活及び地域コミュニケーションを考慮した新たな生活環境を提案することを目標としている。

④ 子どもを産み育てることに関する領域（児童領域とする）

この領域は、受胎から出産を始めとして成人に至るまでの次世代の育成を目標として、児童に関する領域を研究教育の対象としている。保育・児童発達・児童臨床・児童福祉・児童文化・家庭教育等に関する学科目が設定されている。それぞれの隣接又は基礎となる学問分野としては、医学(小児医学・小児保健学ほか)、体育学、脳科学、心理学、文学、芸術学（音楽・美術）等、広範にわたっている。子どもが生まれてから自立するまでの期間のより良い保育の在り方を提案することを目標としている。

⑤ 家庭生活を営み社会の中で生きることに関する領域（家庭経営領域とする）

この領域は、人が生命を維持するために必要な睡眠をとり、心身ともに休養し、生活のための再生産の場としての機能を有する最小単位の家庭（複数以上の人で構成されている家庭又は単身者のみの家庭を意味する）の運営、家族又は近隣の人との関わりや社会における種々の集団に属する人との関わり等を通して社会の中で生きることに関する領域を研究教育の対象としている。家庭経済・家庭管理・生活設計・家族・地域社会・消費者問題・ジェンダー等に関する学科目が設定されている。それぞれの隣接又は基礎となる学問分野としては、経済学、法学、社会学、心理学、体育学、看護学、人間関係学等広範にわたっている。

以上のように家政学は、多くの領域があり、人の暮らしに関わる広範な学科目を有しており、隣接する又は基礎となる多種類の人文科学および自然科学の学問領域に立脚している。人の暮らしは上記の５領域に属する生活行動を組み合わせつつ、１日という限られた

時間の中で営まれ、日々繰り返しながら100年近い年月を重ねて行く。そのため、各領域に属する広範な諸行為を適正な判断の基に総合して捉えることが重要である。

なお、家政学が人の生活を対象とすることから、家政学部では人の暮らしに関わる生活支援のための種々の資格士を養成している（取得できる資格士については項目７に詳述する）。

＊報告の巻末に移動する。

註：
[1] Home　Economics の起源は古く、ギリシア時代にさかのぼる。古代ギリシアの哲学者たちは,人間生活の最も基本的な場として,家をめぐる諸問題を考察した。家政学(オイコノミカ oikonomika)は、ギリシア語で家を指すオイコス(oikos)と法や秩序を意味するノモス(nomos)に由来し、家の秩序をもたらすための家政術を探求する学問として位置づけられた。ソクラテスの弟子クセノフォン(前 430～354)が著した『オイコノミコス(家政を司る人)』では、オイコスは農耕を営む家を指すと同時に、生活に有用な財産の総体という意味で使われている。続くアリストテレス(前 384～322)『オイコノミカ(家政学)』では、家における財政術、家政の原理や掟、人間相互の倫理的関係などが論じられている。そこでは,オイコスがポリスに先立つ最初の共同体として位置づけられている。
[2] 日本家政学雑誌 〇巻〇号〇頁
[3] 日本家政学会編「日本人の生活」―・・・・・―　建帛社刊（〇〇〇〇年）